

# 新『教会通信』(2019年7月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ!

◎『感謝すべきかな、神は何時にてもキリストにより、  
我らを執えて凱旋し、何処にても我らによりて、  
キリストを知る知識の馨をあらわし給う。  
救われる者にも亡ぶる者にも、我らは神に対してキリストの香しき馨なり。  
この人には死よりいづる馨となりて死に至らしめ、  
かの人には生命より出づる馨となりて生命に至らしむ。  
誰か此の任に耐えんや。』

(コリント後書第2章14, 15, 16節)

※『神様、心一杯の感謝をお献げ致します。』

神様は何時も、キリスト様と偕に在る私たちをその御手の中に捉えて、勝利から勝利へと進ませて下さいます。

また何処に在っても、私たちを通してキリスト様だけがお持ちの芳しき馨を周囲に漂わせておられます。

その馨は、キリスト様を知る知識の馨であります。

此から後、御救いに与り神の子と成る者にも、また神の福音に勿体なくも背中を向ける者にも、等しく私たちを通して放たれているキリスト様の香ばしい馨なのです。

しかし、そんなに素晴らしい馨に接している者であっても、それを受け入れなかった者は、恐ろしい永遠の死であるゲヘナに逝く者となり、一方で喜びと感謝の中で受け入れた人は、神と偕に永遠に生きる神の子としての栄誉が与えられるのであります。

嗚呼、こんなにも素晴らしい福音を、此の両極端な者達に接して神の御愛と憐憫を語り告げるに相応しい者は一体誰なのか?』

上記、私訳ですが、その最後、『誰か此の任に耐えんや』とは『福音を語るに相応しい者は誰か?』となります。

それは誰であろう、恒にキリストと偕に在る我等に外なりません。

主の聖霊(御霊)を賜る我らは、恒に主と一体であります。

何時・何処に居ようが、我らは主の香ばしき馨を漂わせて活かされておる存在である、とは聖書に示されたお言葉ですから、私たち神の子供を自認する者は、その信仰の中に“キ

リストの善き馨を放っている”事を自意識の中に捉えると同時に、自らの立ち居振る舞いや発言に留意し、また普段からの身だしなみ等にも十分に気を付けねばなりません。

主の御霊を裡に戴く我らは、主の香ばしき馨の存在を最大限自覚した上で、それが何の為であるのかを各自が導かれて、その上で主からの使命を行動に移すならば、マルコ傳第16章20節の聖言の如くに

◎『主も亦ともに働き、伴うところの徴をもて、御言を確うし給えり』

聖書の聖言は悉く、不思議な現実と成って表れて参ります。

◎『視よ、父の我らに賜いし愛の如何に大なるかを。

我ら神の子と称えらる。既に神の子たり、

世の我を知らぬは、父を知らぬによりてなり。

愛する者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ顕れず、

主の現れたまう時われら之に肖んことを知る。

我らその真の状を見るべければなり。』

(ヨハネ第一書第3章1,2節)

聖書の聖言は、何百回と読み返しておりますも、読む度に新しい感觸に引き込まれて、私には上記の聖言などは、拝読の度毎に天地の創造主であられる神への畏敬の念と過去の生き様との羞恥とが併せられて、何時までもその思念を払拭する事が出来ません。

聖書のお約束に従って“水と霊”のバプテスマを頂戴して約六十五年になる私であります。 “我ら神の子と称えらる”、“既に神の子たり”、“主の現れたまう時われら之(神)に肖んことを知る”等々の文字には、拝読の度に小刻みに震えさえ覚えて参ります。

無論、上記の聖言だけでは無く、異邦人が聖霊を賜って神の子と成り永遠に神と偕に活きる、と言う記述にも、神の家族や永遠の世界をどのように描いて心に刻むべきかも解らず、天を仰いで異言の禱りを献げるばかりであります。

旧約聖書でのユダヤ民族と神との関わりを振り返って、彼の民族的選びを遙かに超えた私たちへのご寵愛の対応を、一体どのように受け止めるべきなのか、全宇宙を統率なされる神のお立場を鑑みますと、畏怖の思念は尽きる事がありません。

さて、前記しましたヨハネ第一書第3章1,2節の聖言を御霊のお導きの中に繙いて参りたいと思いますが、その前にエペソ書第1章4,5節に

◎『世の創の前より我等をキリストの中に選び、御意のままに

イエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり』

と、示されている如くに、此の地球誕生よりも以前から神の一方的な選びに由って、私たちが神の子と成ることが決定事項となっていた事を心に銘記して戴きたい。

此のエペソ書の聖言に『キリストの中に選び』、『イエス・キリストに由り』と、我等の御救いと神の子としての荣誉が与えられる事案には、主イエス・キリストの聖名が関わっている事にも心して下さい。

我等が、父なる神を知る知識の総ては、神の御子キリスト・イエス様を通して与えられて

おり、神様の“愛”そのもののご性質も、キリスト様の十字架の御業を通して実感する事が出来るのです。

ヨハネ第一書第3章1,2節の私訳。

※『神が我等に与えて下さっている愛の偉大さを、真剣に考えて見る必要があります。私たちは、“神の子”と言う称号が与えられているのです。ずっと以前から神様の子供であったと言う事ではありますが、こんなに凄惨な事実を世の中の者達の誰も知らないのは、彼らが、我等のお父様である御方が、唯一真の神様である事実を知らないからであります。』

(ヨハネ第一書第3章1節 私訳)

※『愛する貴方、私たちは今、神様の子供であります。暫くしたら、私たちは行くべき所に行き、又その時、其処には主イエス様が来られて、何と、私たちが主様と似ている事が解るのです。私たちは、其処で主様と自分達との本当の姿を観ることが出来るのですから。』

(ヨハネ第一書第3章2節 私訳)

私たちが主様とお遭いする時、私たちはピリピ書第3章21節

◎『彼は萬物を己に服わせ得る能力によりて、  
我等の卑しき状の躰を化えて、己が栄光の躰に象らせ給わん。』

主イエス様にお遭いする直前に、私たちは見窄らしい人間の肉体を脱ぎ捨てて、主様と同じ栄光の躰に換えられております。

此の世の古びた肉体を纏ったままでの召天などまっぴらであります。神様は御自身の栄光の躰に象らせると言う最高の取り扱いをして下さった上で、我等を神の御許に携え上げる、と仰有います。

嗚呼、何たる幸い。何たる至福。感謝。大感謝。ハレルヤ！

◎『我らに対する神の愛を我ら既に知り、かつ信ず。  
神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神も亦かれに居給う。  
かく我らの愛完全をえて、審判の日に懼れなからしむ。  
我等この世にありて主の如くなるに因る。』

(ヨハネ第一書第4章16,17節)

神様のご気性の本然たるものは、“愛”であります。

つまり神は、純然たる“愛”そのものの御方であります。

人間の立場から見ますと、神様は大変にお厳しい御方とお見受けしますが、“愛”で貫いておられる主イエス・キリスト様のご様子に、“愛”ならばこそその厳しさを素直に受け取る事が出来ます。

聖書に録された“愛”は、十字架上にお生命をお棄て下さった主の御業を基として語られております。

神様は私たちに対して、御自身と同じく愛の人と成れ、と仰有います。

人間社会に渦巻く、裏切り・怒り・嫉妬・偶像崇拜・貪りなどを離れて愛の内を歩め、主イエス・キリストに習う者と成れ、と言われます。

我等の愛が完全ものと成ったら、神が予定しておられる最後の大審判の日に向かって、私たちは何ら心配する事は無いとも言われます。

そうなれば、正しく此の世に在って、お前達は主の如くになれる、と篤い声援を耳元に送って下さる主イエス様であります。

嘗て、私たちは神と其のご経綸の中に何ら与る処の無い存在で、神の選民ユダヤ人からは異邦人と呼ばれておりました。

関わりが無いばかりか、むしろ敵対する存在で在ったとあります。

◎『汝等もとは悪しき業を行い神に遠離り、心にて其の敵となりしが』

(コロサイ書第1章21節)

◎『世の友となるは、神に敵するなるを知らぬか、

誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり。』

(ヤコブ書第4章4節)

我等は、間違い無く、主イエス・キリスト様とは縁も縁も無いばかりか、恒に神に逆らうサタンの分身とも配下とも言える偶像の手の中心がされていた者達でありました。

そんな私達の為に、我等と同じく皮膚の下には神経も血液も流れている人間の児として、此の地上に顕れて下さった主イエス様であります。

罪人である我等を、御自身のお生命を以て贖う為に、神が人と成って十字架での死を目的として地上に顕れなされたのであります。

御自身のお生命を以て、罪人であり神と敵対する我等を、父なる神様との仲を仲介して下さる為でありました。

主の贖いを経て、今、私たちは世界中の誰人よりも、否、過去に地球上に出現したどんな者よりも幸いな身分が与えられているのであります。

天地創造の神の子として、神の認定を戴く私たちであります。

さて、いよいよ愚者も八十路を迎えて、老齡者の仲間入りである事は以前に記しましたが、此処に来て急に之までに考えた事も無かった老境に入った者の生き様をあれこれ思案する昨今であります。

唯一言だけ申し添えておきますが、私自身には老境に這入ったと言う切実な自覚は殆どございません。

未だ子供の頃、人間の一生を考える時に、人間が苦難や努力を経て老齡に達すると言う事は、人生でのあらゆる面に於ける最高の頂点に到達すると言う事で、社会の尊敬と羨望の的として仰がれる存在である、とっておりました。

新生児の誕生を人々は、大いに歓び祝いますし、子供の成長を節目毎に祝い歓待致します。

確かに、社会的には幼児の生命に期待する処は大きいのですが、それに反して年を取った者に対する処遇は、余りにも残酷な側面を目にする機会が多く、人命その物の認識を新たにせざるを得なくなります。

高齢者はテキパキと動きが取れないと言う事で、職場を追われます。

人生で与えられた仕事を全うし終えた筈の老人の一日は、他人に尊敬されるようなものとは程遠く、盆栽でも触っているのは上々の方で、パチンコ・競輪・競馬など日常生活の破綻をもたらす遊技にうつつを抜かすか、或いは何もする事が無く一日中ボンヤリしている中に認知症症状が出て来て、厄介者の烙印を捺されるのが関の山であります。

年寄りには邪魔だ、年寄りには醜い、年寄りには役に立たない……

此の地に誕生した者は、誰でもが迎えるお年寄りであります。

今更、社会に向かって、高齢者保護や高齢者第一主義(ファースト)を訴えて出ても、社会や人心が変わる訳ではありません。

さて、人間を創造なされた我らの神様は、高齢者をどのように扱い対応をなさっておられるのか、旧約聖書に調べてみます。

旧約聖書のユダヤ民族にその形をみますと、先ずレビ記第19章32節

◎『白髪の人の中には起ちあがるべし また老人の身を敬い  
汝の神を畏るべし 我はエホバなり』

◎『老いたる者の中には智慧あり 壽長者の中には悟りあり』

(ヨブ記第12章12節)

◎『少者の栄はその力 老いたる者の美しきは白髪なり』

(箴言第20章29節)

◎『白髪は栄の冠弁なり 義しき途にてこれを見ん』

(箴言第16章31節)

此等の聖言の中に、老人を軽蔑し侮辱する意味合いは全くありません。

人間が勝手に、自らの長寿を貶めている事を認めざるを得ません。

“終活”と言う日本語に始めて接して暫く、私は、死後の世界に何らかの繋がりを持つ方法を探る宗教界の話かと思っていました。

つまり、死後に何とか快適に生きる方法を、何処かの宗教が喧伝しているのかと正直そう思っておりました。

長い人生の終わりに際して、死後の世界を明確に把握して、平安の中に死を迎えようとする心構えを追求するのかと、一種感動のようなものを覚えた気が致しました。

しかし、何の事はありません、“終活”とは、死後を身の廻りの者に迷惑が掛からないように整理・整頓を確実に仕上げる事であるとか。

新約聖書には調べるまでも無く、我らが置かれている信仰生活の現実を聖言に照らして参ります。

先ず、ピリピ書第3章20節 ◎『されど我らの国籍は天に在り』

次いで、ルカ傳第10章20節 ◎『汝等の名の天に録されたるを喜べ』

主イエス様が十字架での贖いの御業を経て、新しく開いて下さいました“水と霊”のバプテスマを戴いた者には、上記の聖言に欠ける処なく、しっかりと其の者の名が天の国籍に記録されております。

つまり、老後などと言う言葉は、我らには不必要であります。

新約聖書の恩寵の中に在る我等は、ロマ書第6章に記されたる如く

◎『凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、その死に合うバプテスマを受けしを。』(3節)

◎『われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の軀ほろびて、此ののち罪に事えざらん為なるを。そは死にし者は罪より脱るるなり。』(6節)

◎『斯くのごとく汝らも己の罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思うべし。』(11節)

我らは、イエス・キリストの聖名による全身浸礼(洗礼)を受けた時に、その水は只の水にあらずして、主が十字架に於いてお流し下さった御血に換わっており、我らはその御血に全身洗われて、過去の総ての罪惡即ち罪・咎の類が総て洗い流され潔められたのであります。

◎『我等もしキリストと共に死にしならば、また彼とともに活きんことを信ず。』(8節)

キリストは確かに、十字架上に生命を墮とされましたが、三日目に甦えったように、我等もキリストと共に永遠の生命に甦えったのであります。

一度死んだ者は二度と死ぬ事はありません。(但し、新約聖書に於いて“第二の死”と記されておりますのは“ゲヘナ”を意味しております。)

故に、我等は一度死んでおりますから、もう死ぬ事は無いのです。

主の御再臨まで生きて残れる者は、

◎『生きて存れる我らは彼らと共に雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎え、斯くていつまでも主と偕に居るべし。』

(テサロニケ前書第4章17節)

上記の空中に携挙される時は勿論の事、又それ以前に、寿命が尽きて神の許に召される場合でも、

◎『彼(主イエス様)は萬物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の軀を化えて、己が栄光の軀に象らせ給わん。』

(ピリピ書第3章21節)

此の聖言は前に記しましたが、我ら人間の朽ち果てて行く卑しき軀を主イエス様と同じ栄光体に化えて携え挙げて下さるのであります。

栄光体に化した自分が、父なる神様と、神の御子イエス様と、此の地に在りて神を信じた多くの諸先生方、諸聖徒方と、永遠に神の家族を構成して、空中に携挙される七年間、一掃

された此の地球での千年王国、最後の<sup>しんぱん</sup>大審判を終えた後の新天新地、と<sup>まばゆ</sup>目映いばかりの光の中を約束された我らの身分であります。

愛する兄弟・姉妹、これが神様が約束下さった我らの<sup>これから</sup>今後であります。

しかし、その前に我らは、此の地上に<sup>あ</sup>在って<sup>な</sup>為すべき事<sup>は</sup>を果たさねばならない大切な事が、<sup>さんせき</sup>実は山積しておる事も忘れてはなりません。

それを<sup>な</sup>為さねば、<sup>みたま</sup>御霊を<sup>あ</sup>侮る<sup>がた</sup>救い難い<sup>おか</sup>罪を犯す事に成りかねません。

◎『兄弟よ、われは既に<sup>すで</sup>捉えたりと思わず、<sup>ただ</sup>唯この<sup>いちじ</sup>一事<sup>つと</sup>を<sup>さ</sup>務む、  
<sup>すなわ</sup>即ち<sup>うしろ</sup>後のものを忘れ、<sup>はげ</sup>前の物に向かいて<sup>めあて</sup>励み、<sup>さ</sup>標準を指して進み、  
神のキリスト・イエスに<sup>よ</sup>由りて<sup>め</sup>上に<sup>かか</sup>召したまう<sup>かか</sup>召しに関わる  
<sup>ほうび</sup>褒美を得んとて<sup>え</sup>之を<sup>これ</sup>追い求め。』 (ピリピ書第3章13,14節)

使徒パウロ先生が言われている『この<sup>いちじ</sup>一事』が何か、<sup>な</sup>緒聖徒方には<sup>な</sup>為すべき事の何たるは<sup>しやうち</sup>ご承知の通りであり、<sup>め</sup>私たちも『<sup>ほうび</sup>召しに関わる<sup>ほうび</sup>褒美』を<sup>はげ</sup>追い求めて前に向かって<sup>はげ</sup>励もうではありませんか。

主は間もなく来たり給う。アーメン、主イエス様、来たり給え。

(2019年7月1日 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)